

#### 第4節 甲府城下町遺跡出土の真牡蠣について

今回の調査で、当時の食生活の分かる動物骨、魚骨、貝殻が出土した。特に目を引いたのは、県内では鰍沢河岸跡遺跡でもマガキの殻は出土しているが、こんな大きな殻はめったに見たことがない、と言うような巨大なマガキの殻。

江戸時代、牡蠣は、日本最初の魚類図鑑『日東魚譜』に紹介されている。『日東魚譜』には、1. 享保4年（1719） 2. 享保16年（1731） 3. 享保21年（=元文元年、1736） 4. 元文6（=寛保元年、1741）の4種類があり、それぞれ構成・所収品数・図の出来が異なる。

写真は4. 元文6年版の牡蠣の紹介箇所の一部である。(国立国会図書館デジタル化資料より引用)



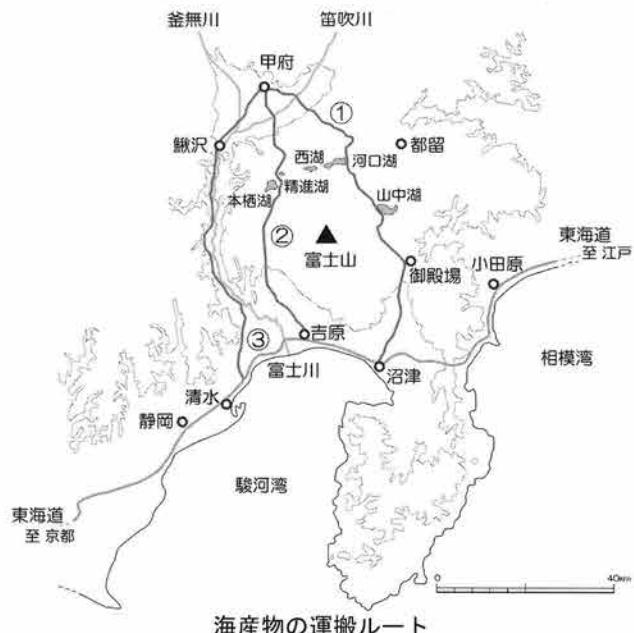
内容は、牡蠣の当字、名前の由来、生態、気味（香と味）、効能が紹介されている。効能には、炙食、煮食、生食の場合の効能が紹介されている。

山梨の食文化に関しては、『甲州食べもの紀行－山国豊かな食文化－』論考2「山梨の食文化を記録した歴史資料について」で詳細な分析が行われている。そこで、今回はマガキに焦点を当てて、当時の料理本、紀行文から実際にどのようにして料理していたのかを見てみる。

その前に、海から離れている甲府まではどのようにして海産物は運ばれていたのだろうか。

ルートは、①沼津から御坂峠を越え黒駒道を行く「鎌倉往還」、②富士吉原から本栖湖・精進湖の間を抜けて古関、右左口を経由する「中道往還」（「魚の道」）③富士川の3つのルートが知られている。

今回の調査で貝類は、マガキの他に赤貝、アワ



ビ、ハマグリ、サザエの殻が出土している。その産地は、例えば、沼津あたりと考えると、江戸と比べて近く、生のまま運搬出来る可能性はあったかもしれないが、江戸からの生牡蠣は難しいのではないだろうか。

江戸時代、甲府に最も近いカキの産地は江戸であった<sup>i</sup>。カキの価格は安く、大阪はカキご飯にして食べていた<sup>ii</sup>事は紹介されているが、江戸の庶民がどのようにして食べたのかは紹介されていない。

上流階級は「カキの吸い物」「カキのてんぷら」を食べていたという記録がある<sup>iii</sup>。県内では前出資料中には<sup>iv</sup>「牡蠣」は登場していない。したがって県内のカキの料理方法は良く分かっていない。可能性として、大きなカキ殻は「貝鮑」のように盛付けのために使用されたかもしれない。

また、食用としてではなく、カキ殻は漆喰、石灰の代用品、薬として活用されていた<sup>7</sup>とも紹介されている。

『和漢三才図会』(宝徳三(1713)年、寺島良安)  
卷六十七「武藏國土産 品川」

<sup>ii</sup> 『類聚近世風俗志』(明治四十一(1908) (原名『守貞謾稿』(天保八(1837) ~嘉永六(1853)) (喜田川季莊著, 室松岩雄等編) 「第五編 生業下」)

<sup>iii</sup> 『鬼平舌つづみ』(2004年、文藝春秋社編) (底)

本は『料理物語』(寛永二十(1643)、著者・出版社不詳)

iv 『甲州食べもの紀行－山国の豊かな食文化－』論考2「山梨の食文化を記録した歴史資料について」

v 『大和本草』(宝永六(1709)年、貝原益軒)卷十四「牡蠣」

## 第5節 まとめ

調査地は江戸中期以降、現在まで県市の行政をつかさどる公的施設が存在し続けた場所である。宝永元年(1704)～享保9年(1729)の甲府藩柳沢氏の領有期には城代の平岡将監屋敷、その後幕末までは甲府勤番支配大手役宅、明治期には山梨県庁、県庁移転後の昭和期には甲府郵便局、甲府水道局と続き、昭和34年(1959)に甲府市役所が建設されている。そしてまた、このたび甲府市役所の新庁舎が建設される。行政の中核地として使用され続け、新しいものが作られ続けるということは、裏返すとそれだけ以前のものが見えにくくなるということになる。このような状況の中で今回の調査では江戸中期の屋敷内に作られた池を持つ庭園の様子や、内陸の地にもかかわらず大きなマガキなど高価な海産物を消費する豊かな食生活、幕末までの間の勤番支配役宅を見る、表門周辺の様子や甲府上水を引き込んだ巧みな水利用、炊事場の様子などをうかがい知ることが出来た。

また、写真にも残る明治期の山梨県庁のE字形に南を向いた洋風庁舎の基礎構造を知ることができた。最下層の杭から規則的に配列され緻密に計算されていることや、基礎中間に玉石を用いることで下層の胴木・枕木材が水に浸かりやすくして、木材が朽ちたり、腐食したりしないように考慮していることなど明治期の技術を明らかにできた。また一方では、礎石、根石は加工されているが定型ではなく、それぞれまちまちな形をしており、2寸幅や3寸幅の矢穴を持つものもあることから、転用品である可能性も考えられ、当時の建築費用のやりくりの苦勞もうかがうことが出来た。

このように今回の調査では比較的大型の遺構が目立つ傾向にある。しかし、一方で貴重な小さな遺構も検出している。いずれも土間の縁辺部で検出した2号・27号・51号・58号・59号の各ピットからは埋納された胞衣皿が検出されている。出産後に後産を入れて埋納した容器で上皿と下皿を重ね合わせて使用された。胞衣埋納の目的に関しては諸説ある

が、子供の行く末を願う行為とするものもある。また、胞衣埋納遺構は近世江戸地域の検出事例に比べ、他地域では希少な遺構とされる。このような遺構が集中して検出されたのは勤番士が江戸からの風習を持ち込んで來ていたためということが考えられる。いずれにしてもこの地で新しい命が産まれ、慈しまれていたということが、分かったことは非常に喜ばしいことと思われる。今回検出した胞衣皿の中には「寿」の文字が確認できたものはないが、58号ピットの共伴遺物の痕跡の可能性を検出できた。下皿には中空の鋸が僅かに付着しており、共伴埋納された針の地金が腐食し、周囲の鋸のみが残存した状態を推量することが出来る。さらには、針の共伴埋納とすると女児に対する祈りが込められた胞衣埋納ということも想像することが出来る。

今回の調査では行政の中核を継続する地という立地条件にもかかわらず、大小の多くの遺構、遺物を検出するに至り、各時期の様子を一部ながらも明らかにすることが出来ることは貴重な成果と考える。

## 【参考・引用文献】

- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房  
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』  
甲府市教育委員会他 2001『甲府城下町遺跡I』  
甲府市文化財調査報告 15  
甲府市教育委員会 2002『甲府城下町遺跡II』甲府市文化財調査報告 19  
甲府市教育委員会 2006『甲府城下町遺跡III』甲府市文化財調査報告 33  
甲府市教育委員会他 2007『甲府城下町遺跡IV』  
甲府市文化財調査報告 39  
甲府市教育委員会 2009『甲府城下町遺跡V』甲府市文化財調査報告 52  
甲府市教育委員会他 2012『甲府城下町遺跡VI』  
甲府市文化財調査報告 57  
甲府市教育委員会他 2012『甲府城下町遺跡VII』  
甲府市文化財調査報告 61  
甲府市史編さん委員会 1992『甲府市史 通史編 第二巻 近世』  
山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡(日向町遺跡第2地点)』  
山梨県教育委員会 2005『県指定史跡甲府城跡』  
山梨県教育委員会 2007『甲府城下町遺跡(甲府地方裁判所地点)』